

COMBINED FLEET GIRLS COLLECTION FAN BOOK



おしっこれくしょん 駆逐艦編 参

PISS-COLLE DESTROYERS
III

VOLUME 04 FOR ADULT ONLY

（軽巡洋艦 夕張の日記より）

八月一八日 工廠での業務が捗らない。鎮守府が慌しいなか、技術本部から送られてきた戦艦用試製主砲の調整に手間取り、今日の射撃テストは延期された。皆に申し訳ない限りだ。駆逐艦の子たちにひどく心配されてへこむ。疲れているのだろうか？ だけど、由良も五月雨ちゃんも長期の遠征で奮闘するなか、私ひとりサボるわけにもいかない。自慰二回。オカズは霧島さんと青葉が撮った、五月雨ちゃんの裸身。無毛の割れ目は本当に尊い。

八月二十三日 スパナと間違えて食堂のスプーンを持っていると明石さんに指摘され赤っ恥。ほかに、何か大事なものを失くしたような気がするものの、それが何かを忘れてしまったようで、業務が手につかず。いよいよ絶不調か。何故かいろいろな艦娘が、休養を命じられた私のもとを訪れ、大丈夫だ、絶対に探しだすと言ってくれた。いったい私は何を失くしたのだろうか？ 由良や五月雨ちゃんなら知っていそうだけど、ふたりともまだ遠征中だ。頭に霞がかかったような気分のまま、部屋で五回も自慰をしてみ、軽く自己嫌悪。五月雨ちゃんにおしっこをかけられたい。その中でなら、沈んでもいい。

八月二十六日 休養四日目。由良と五月雨ちゃんは何処まで遠征に行ったのだろうか。何度目かの自慰で絶頂した直後に、顔見知りの駆逐艦の子たちがやってきた。さすがに死にたくなっていると、皐月ちゃんがなにやら決然としたようすで私に言った。

「ボクたちがさ……しばらく、さみちゃんの、かわりに、なるから」
そして、皐月ちゃんは服を脱ぎはじめた――

睦月型五番艦 皐月

下着姿

『前世』で彼女とは長い付き合いだった。戦争が始まるずっと前、私が栄えある二水戦艦に着任したとき、皐月ちゃんは新設された二三駆のリーダーとして私のもとへやってきた。それから何度も編成が変わり、戦争中に南洋で再会。私が沈むまではずっと部下だった。そんな間柄だから、気心は知れている。こんなふうには「ああ、少しおしっここの匂いがする。ぱんつ尊いわ……」。「……ごめん、ちよつと帰りたくなつた」

胸部装甲

勝気な金髪ロリっ子として二度目の生を享けた皐月ちゃん、洋上でも戦うというより、元気に跳ね回っている印象。こっぴどく被弾して、ほんのわずかに膨らんだおっぱいを隠そうともせず帰投することもあって、そのたびに私は目のやり場に困る。「イヤ……ガッ見じてるじゃんいつも。今みたいにさ」

陰部

駆逐艦娘の、まだ性器とも呼べない割れ目ってなんでこんなに尊いのかしら。私は、目の前で真っ赤になりながら、軽装甲を身に付けてばっただけ脱ぎ、スカートをまくる皐月ちゃんを見る。まったく発毛の見られない恥丘の下、股間にちよんと切れこんだ縦筋を、食い入るように見つめる。はあ……尊い。TOU TOI。



性器

くにゅつ。と、皐月ちゃん
しなやかな指が、もぎたての
桃のような大陰唇に沈みこみ
そのまま左右に押し広がる。
足を広げてもほとんど中身の
見えなかつた割れ目が形を変
え、ほとんど包皮に覆われた
陰核と、小高い突堤程度の小
陰唇や、ようやく指一本が通
ろうかという膣口が姿を見せ
た。同時に、こぼり。と、愛
液が溢れてお尻へ伝う。私は
顔を近づけ、鼻から思いきり
息を吸い、それだけで絶頂に
達した。

放尿

性行为にしか使わない、自室備えつけのユニット
バスに、大きく脚を開いて皐月ちゃんが腰かける。
しばらくして、割れ目からお尻のほうへ薄黄色の
水流が生じ、すぐに勢いよく正面へと吹きだす。
十秒近い排泄を終えたあと、皐月ちゃんは潤んだ
眼差しを私に向け、声を震わせた。「夕張姉ちゃ
ん……拭いて」

洗浄………？

これは、そう、皐月ちゃんの
大事などころに残るおしっこ
を拭ってあげているだけ。た
またま、私の指が彼女の狭隘
な膣に入りこんでしまつて、
そこから伝わる刺激に堪えき
れない皐月ちゃんが、失禁し
ながら嬌声を上げているだけ。
もののはずみて思わず、「夕
張姉ちゃんのこと………ほん
とはずつと………好き………だつ
たよお………」なんてあらぬこ
とを、彼女は泣きながら、口
走っているだけ………。

睦月型七番艦 文月

下着姿

こんなことがあっていいのだろうか。純真そのものといった風情の文月ちゃんが、お尻をすっぽり包む供ばん一枚の半裸で、頬を赤らめつつおすおすと私を見上げる。私は生きながらにして極楽浄土に達したのかしら？ ぽっこりとした下腹部の丸みがいかにも幼げで、ああ心の高角砲が最大仰角。

胸部装甲

「恥ずかしい……けど、皐月ちゃんがやるって言うから」と文月ちゃん。いまだ艦娘として現れていない水無月ちゃんを除けば、彼女は皐月ちゃんとならんで二二駆最後の生き残りだった。二時期艦長どうしも友人だったはず。そんな記憶からか、二人はとも仲がよく、文月ちゃんは皐月ちゃんのことについて回っている。何が言いたいかというと、炬っぱい尊い。

陰部

皐月ちゃんと同じく、まったく発毛の見られない、ただの割れ目だ。睦月型駆逐艦は旧式で小型だったためか、艦娘としては姿となった結果無毛の子が多い。陰毛が生えているのは如月ちゃんと弥生ちゃん……と考えたところで、脳内に駆逐艦娘の陰毛データベースが構築されている自分が恐ろしくなった。



過熱したボイラーのように赤面しながら、
“まんぐり返し”の姿勢で広げた大陰唇の
なかから、未成熟な陰核や小陰唇、膣口が
顔を出した。臯月ちゃんと同じくらい幼
くて、けれど、形ははっきり違う。ネット
でたまに遭遇する、勃起した男性器はどれ
もこれも似たようなかたちで面白くないし、
そもそも気持ち悪いけど、女性器は本当に
十人十色だ。そして、すべてが尊い。

性器

放尿

「夕張お姉ちゃん……出る……」仁王立ちになった文月ちゃんが、
熱にうかされたように眩き、割れ目をぐっと押し広げる。と、しよ
わわ……と、おしっこが噴出。ほぼ直下。すなおち浴室に寝そべ
る私の顔めがけて、ひたひたと流れ落ちた。浴室で水を浴びるのは
まったく普通のことである。「小」は付くかもしれないけれど。

自慰

「夕張お姉ちゃんっ……あたし、お姉
ちゃんが喜ぶなら、こんな恥ずかしい
ところも見せられるよ……? ……あ
たしたち、あたしじゃダメかな……
っ? あの子より上手く、ひ、引っぱ
れるかもしれないよ」「文月ッ! そ
こまでだ」突然、長月ちゃんの鋭い声
が飛んだ。話が見えないんだけど……

睦月型八番艦

長月

下着姿

「うう……恥ずかしいなあ」二二駆のなかでも勇ましい長月ちゃんが、真っ赤になって、ぱんつ一枚になった。「普段はかないような可愛いぱんつ付けてきたくせに」「う、うるさいっ!!」皋月ちゃんの煽りに怒鳴る長月ちゃん。「ゆ、夕張姉にカツコ悪い下着なんて見せたくないじゃないか……」



胸部装甲

「その……夕張姉、貧相ですまない」照れまくる長月ちゃん。私は首を振る。「ううん。おっぱい、可愛いわよ」「……!!」二段と赤面する長月ちゃん。睦月ちゃんや如月ちゃんに比べれば、そりゃあたいへんささやかな胸部装甲だけど、こちら泣く子も黙るロリコン軽巡。大丈夫だ、問題ない。



陰部

そういうえげなことでこんなことをしているんだらう? 脱いでもらった。「こ……ここまで見せる、のか。やっぱり」「つるつるだから恥ずかしい?」と文月ちゃん。長月ちゃん、屹ツと涙目で彼女を睨むと、「つるつるじゃない!」少しだけ生えてきたんだ! 夕張姉、見てくれ!!」とスカーフをまくり上げると、たじかに、陰核包皮の上あたりから、かような陰毛が数本「わああ!!」夕張姉、そんな間近で見ないで! 嗅がないで!!!」



性器

「ど……どうだ？ 夕張姉

「……」「どう……って？」
「私は皐月や文月、……五
月雨のように可愛くはない
から、せめて、その、ここ
だけでも可愛いといいな
思っただけ……だが「消え入
りそうな声の長月ちゃん
性器を広げている。びよこ
んと盛り上がった陰核包皮
や、ひだとも言いがたい発
展途上の小陰唇がうっすら
色づいているのは、なるほ
ど可愛いのかも、れないが、
劣情を隠しようもない私の
性器は、もはやだらないの
愛液を垂れ流すのみだ。」

放尿

「うう……」ストッキングごとばんつを下ろして
しゃがみこむや、じよろろ……と勢いよく排
泄を始める長月ちゃん。色も匂いもかなり濃厚。
「あ、朝から我慢してたんだ……おしっこが私
の足元まで流れてきた。思わず手を浸し、生温か
さを感じてから舐めとる。理性が焼き切れた。」

つながり

「夕張姉……夕張姉……」
「こよ」彼女は、こよバンガラ島の浜辺で座礁し、ひとりで最期を迎えた。一緒に揚陸作業をしていた皐月ちゃんや、作戦直前に被雷して編成から外れた私のいないところ。夕張姉……ひとり……に……
「……しないでえ」
ぎゅうう……と私の肩を掴む手に力が入り、長月ちゃん達は達した。

睦月型九番艦 菊月

下着姿

「まったく落ち着きがないな、お前たちは」二三駆の菊月ちゃんが冷ややかに姉たちを見ている。ぱんつ一枚で。「兵士が肉体を晒すことに何の恥じらいがある？」長月だつてそれなりに鍛えているだろうに。「ヒトをナルシストみたく言はんじやない！なんだよ、つまらない下着はいて」「下着で防御力が上がるのか？」長月と菊月、同じ意味を持つ名の姉妹、なんだか険悪な雰囲気。

胸部装甲

「胸筋も鍛えてはいるつもりだが、いわゆる乳房というやつはたかが知れている」と菊月ちゃん。「別にどうでもいいが、これで深海どもどやりあつてはいるわけではないからな。まあ、あなたのお気に召すなら幸甚だよ夕張」

陰部

「こんなところを見つめて楽しいのか？」菊月ちゃんが呆れ気味に言う。「女性器など、皆同じではないか」ぶちっ。「違う……全然違う」「夕張？」「そがんねえ！誰のねえ！誰のぼぼでもねえ！同じや同じや思いようでえ!!」「落ちつけ夕張！佐世保弁が出る！」「オホッ。とにかくくね、違うのよ。あなたのと長月ちゃんのも違う。あなたのほうが大陰唇に厚みがあつて、陰核包皮は小さめだし、まだ発毛が見られないわ。陰裂も長いし」「そ、そうか。違いのわかる女なんだな……」

性器

「夕張……くすぐつたい、菊月ちゃんがいじれたそうに声を上げる。「あと、手つきがいやらしいぞ」「いやらしいことしてのよ」私の指ですっかり広げられ、露わになった彼女の性器にそつと息を吹きかけると、菊月ちゃんの身体がビクン！と大きく震えた。「なんなのさ……いったい」声も震える。「ん……ほんとうのきもちが聞きたいなって」「えっ……？」「菊月ちゃんの全部……、私たちに見せてよ」もう少し。もう少し、彼女の芯に迫る。

放尿

「こ、こんなのっ、て」私の指示で、自ら性器を広げさせられた菊月ちゃんが呻く。「さあ……出して」意識して、ことさらに低い声でささやく。いつだったか、声だけはいいいわよね、と由良に言われたつけ。果たして、「んっ……ああっ！」ふじやあ、と尿が噴きだす。あやまたず、大きく開けた私の口へ。「ああっ？」「ダメ、夕張……っ」「ふっ……あふっ」身体の芯から燃えあがるのを感じながら、私は飲んだ。菊月ちゃんのすべてよ、この夕張に届けとばかりに。やがて、「……あああああ」と菊月ちゃんが泣き声をあげた。

遙か君を離れて

「私っ……私も、最期はひとりだった」まだミッドウエーでの敗北を迎える前。私たちはツラギ島を確保したが、その翌日、駆逐艦・菊月はツラギ島で爆撃に遭い大破。放棄された船体はそのまま朽ちるに任された。その場に、当時二三駆を統率していた六水戦艦の私はいなかった……。「長月が、羨ましかつた。私は何の武功も挙げられぬままに沈んだから……。輪に入れなかつた」「そんなのっ！誰も気にしてない！」「まだ下着姿の長月ちゃんが悲しそうな泣き声を上げる。私はひいひい泣く。菊月ちゃんを抱きしめる。もう二度とひとりにならないと、抱きしめる。

睦月型十番艦 三日月

下着姿

睦月型十女・三日月ちゃん。姿かたちもだいぶいけれど、二三駆でキャリアをスタートし、航空戦隊に単身赴任したりしてあちこちで活躍した頑張り屋さんだ。今も私のために半裸で頑張ってくれている。「夕張さん……その、興奮してもらえていますか？」待って、ごめん、鼻から魂抜けかけた。

胸部装甲

セーラー服を捲りあげ、ぺったりぺったりとオノマトペの聞こえできそうなおっぱいを、恥ずかしそうに晒す三日月ちゃん。ああ、そうだとこの一生懸命な感じ、五月雨ちゃんによく似ているんだ。そうこぼすと、三日月ちゃんが一瞬、悲しそうな目をした気がした。

陰部

子供ばんつをずり下げてスカートをめくり、まるつきり幼い割れ目を見せてくれる三日月ちゃん。人間の幼女相手にこんなことをやっていたら、即決裁判で銃殺刑だろう。艦娘でよかつた、と心底思う。



性器

「見て、いいですよ」
 その声に導かれるまま、
 そつと指で大陰唇を押し
 開く。「どう……で
 すか？ 私の、おまん
 こ」「ぶっ！」思わず
 咳きこんでしまった。
 「み、三日月ちゃん、
 どこでそんな言葉を、
 「私も、そこまで子供
 じゃありません。夕張
 さんに見られて、すご
 く興奮しているんです
 よ……ボイラーが吹き
 飛んでしまいそう」な
 るほど、しどどに濡れ
 た隘口からは、濃厚な
 「匂い」が漂ってきて、
 あてられそうになる。



放尿

「おしっこしていいわよ」
 人間が乳児にそうするよう
 に、座ったまま三日月ちゃ
 んを抱きかかえ、後ろから
 耳元にささやく。と、「あ
 ……あつ、出……ます……」
 じよわしよわ。陰裂からう
 す黄色い尿が吹き上がり、
 浴室の床に広がっていった。
 「はあああああ」がくがく
 と、全身を震わせる三日月
 ちゃん。達してしまつたら
 しい。ちよろちよろと排泄
 しながら余韻に浸るさまは、
 とてつもなく淫猥だ。

君という光

「な……っ」まだ目元の赤い菊月ちゃん、
 三日月ちゃんに押し倒されて、驚きと羞恥
 の入り混じった声をあげている。「なに、
 を、するんだ」「菊ちゃん……愛してる」
 「えっ」「望っちゃうんだってそうよ。睦っ
 ちゃんもきさちゃんも、臆っちゃうも……
 私たちみんな、あなたを愛してる。姉妹だ
 もの。戦功とか、関係ない」「……不安だよね。
 「でも、言葉で何を言っても、筋に、唇に、
 身体で伝えるの」「あ、あう首
 だから、唇に、乳首に、膝頭に、おへそに、
 陰核に。指で、舌で、唇で、愛撫が続く。
 「み、か」ぼろぼろと涙を流す菊月ちゃん。
 それは喜びなのか、悦びなのか。「きく
 ちゃん」「三日月ちゃんも、泣きながら菊月
 ちゃんの愛液を吸っている。私は溢れる涙
 を拭わず、彼女たちが再び結びつくさまを、
 最後まで見届けた。



陽炎型十番艦 時津風

下着姿

「夕張さんが大変なことになってるって聞いたけど、いや、ほんとに大変だね」十六駆の時津風ちゃんにやにやと私たちを眺める。陽炎型の子はみんな、どこか不遜だ。「大丈夫だよ、雪風が探しにいつてるから。あの子なら必ず助けてくれる」。「？」。「ま、いいや。あたしの裸でも見て元氣出しなよ」言うが早いか、ぺろんとぼんつ一枚に。なんとも……その……先進的なデザインだ。今の今まで肌を晒していた睦月型の子たちが、きゃーきゃー騒いでいる。

胸部装甲

「どお？ 興奮するでしょ？」つるぺたの胸を張り、どや顔の時津風ちゃん。「雪風あんなんだけど、ちよつとだけおっぱいあるんだよね。そこいくとあたしは純正ロリだから、安心してオカズにしてね」うう、私の童貞マインドが傷つく……五月雨ちゃんみたいな純真さがほしい。

陰部

「さ。両手ふさがってるから、ストッキング下げて紐ほどいてよ」「で、でも……」「そうしないで見られないよ？」「……」「あつ……えへ。夕張さんにあそこ、見られちゃった」

性器

「はい。ロリまんこくちつ、と性器を広げるとき、と性器を広く見ると、頬はかなり上気して、瞳はじつと潤んでるのね。興奮して余裕なんだと思ってる。おまんこ晒して興奮しない子はあんまりないんじゃないかな。雪風たち以外でこんなところ見せるの、夕張さんがはじめたもん……ね、どお？」

「うん……小さくて、ピンク色でかわいい。そして、いやらしい」

「……へへ、改めて言われると、照れちゃう」

放尿

「早いものやり方、見せたげる」

「言うが早いから、時津風ちゃん、上の裾をからげてお尻を出すと、ストッキングを下ろし、ぽんつをするのと取り去って中腰になった。次の瞬間、後ろ向きに排尿が始まる。」「ふう……我慢してたんだあ」

「浴室に新たな尿溜まりができていく。」「夕張さん……すっごい、いやらしい顔してる」

自慰

「はっ……ん。あつ」幼げなつくりには似合わないほどの蕩けた表情で、膣口に左手の中指を出し入れし続ける時津風ちゃん。時折、右手で陰唇や陰核まわりをこね回す。」「……どこで覚えたの？」「こっち」来てすぐ……アマツが、夜中に雪風と、島風にえっちなことされて……最初びつくりしたけど、教えてもらったらすぐく気持ちよくて……初風もしよつちゅう、妙高さんオカズにしてるし。あたし、おまんこいじつてると、ほんとに生まれ変わったんだなって思う……生まれ変わったんよかつたって……思うの。あ、あ、いくつ……ゆきかじえ……」



陽炎型十八番艦 舞風

下着姿

「大丈夫よ夕張さん！」いつも軽やかな足取りの舞風ちゃんが、今もどこかふわふわと私にまわりついてくる。「トッキーの言うとおりでから！それでも不安なときは身体動かすのが一番！」「私インドア派なので……ていうか不安って何？」「……重症だなあ。まいいや！あたしも裸見せたい」陽炎型のほとんど末妹な舞風ちゃんだけど、長姉の陽炎ちゃんに似て手足がスラリと長い。将来はすごい美少女になりそう。今はまだ、ぱんつ丸見えで、はしやぎ回る無邪気な女の子だけだね。

胸部装甲


フフン、と悪戯っぽい笑みを浮かべつつ、胸のバストとワイシャツをはだけておっぱいを露出。「そろそろ、ブラつけたほうがいいんじゃない？」「そうかな？ おっぱい全然ないって思ってたけど」「睦月型の子に比べたら膨らんでるわよ」「ちよつと！引き合

陰部

ぱんつをずらすと、わりあい発達した性器が見えた。でも、発毛はまだ先のようだ。「はやく陽炎お姉ちゃんみたいに大人っぽくならないんだだけでほしいです。」



性器




「ここ見せるの、夕張さんがはじめてです……ちゃんとは見てね？」とろとろと愛液の溢れる舞風ちゃんの性器を、しっかりと目に焼きつける。厚ぼつたい陰核包皮と、ぷっくり真珠のように膨らんだクリトリス。そして、まだ色素は沈着していないけれど肉厚な小陰唇。どのパーツも「女」になる準備は万端と自己主張している。それでいて陰毛はまだ産毛程度のアンバランスさはいかにも少女的で、私は思わず愛液を舐めとって、「あんま」待って、おしっこ出そう……」

放尿

「だいたい入渠中にすませちゃってるわ、陽炎お姉ちゃんに見つかって怒られたけど、お姉ちゃんもドックでおしっこしてること知ってるよって言ったら慌てた。それから一緒におしっこするようになってね。時々、並んでこうやって、立ってあそこを広げてることも……」言葉どおり、陰裂が開く程度に広げられたあそこから、ちよろちよろ、しゃああ……とおしっこが放たれた。気持ちよさそうに放尿しながら、舞風ちゃんがぼつりとおしっこ。おしっこ。「野分と……いっしょにおしっこしたいな、こうやって」

自慰



私の膝に顔をうずめた舞風ちゃんが、激しく喘いでいる。私は左手で、彼女の頭を優しく撫でつづける。そこから伝わる、彼女の震え、膝を借りたい、と舞風ちゃん。き、気持ちよくなるのと同じ時、とても怖くなるのだとか。絶頂は死にも似ている、と聞いたことがある。とすれば、舞風ちゃん。死の記憶が脳裏に去来する話としても不思議ではない。話に伝え聞く、地獄さながらの死のありさまが……。「あ、あ、あーっ」ぷしゃあ、あ、あ、あ、あ……泣き声をあげ、おもらししながら、舞風ちゃんは私の膝の上で果てた。

朝潮型九番艦 霰

下着姿

おとなしい霰ちゃんまでやってきて、もしもじとしていいる。神通の秘蔵っ子たる十八駆の長女で、あの陽炎ちゃんが「お姉ちゃん」と呼び慕う子だ。身体つきなんか十八駆でもいつとうロリっちいののに、見かけによらないものがある。睦月型の子たちがみんなリィブラだったので、キヤミがなんだか新鮮。

胸部装甲

エスカレーター式のお嬢様小学校みたいな外部装甲だなあ、と常々思っていたのが運の尽き(?)。気がつけば、服を全部着こんだ状態で上下ともはだけさせるといいう、我ながらさすがにアカン感じの格好をさせていた。涙目でうつむく霰ちゃんの、ようやく球形をとりはじめた乳房はいかにもロリッタな趣だ。

陰部

霰ちゃんがかわいらしいばんつを下ろそうとする直前、それに気づいた。「あつ……うっすらと生えた陰毛の真下。まだはつきり見える割れ目から漂う強烈な鉄の匂い。そして、ぱんつのクロッチ部分にあてがわれたシートに広がる赤茶けた染み。……ごめん」。「いえ……どうして艦娘にも月のものがあるんでしょうか？」



放尿

勢いよくおしっこを下ろして、しゃがんで
は、もう学校からの帰り道
で尿意を我慢できなくなつた。学生
のソレにしか見え
ない。尊い。実際、遠征中
には洋上でこういう光景が
見られるのだ。私がつぼ
ら工廠にいるのは趣味と任
務を兼ねてのことだけど、
これだけは、遠征を率いる
ことでもある由良が羨ましい
と言つたと、回転龍尾脚を喰
らつたけど。

性器

「すぐく、恥ずかしい……です」
羞恥に声を潤ませ、霰ちゃんが経
血に染まった性器を広げる。陰核
が充血気味なのは、興奮のただな
かにあることの証だ。さまざま
種類の「女」の匂いが鼻腔を刺激
し、私は軽く達しそうになる。



自慰

「んっ……ぬい……」
不穏な名前を口にしない
が、指で膣内を激し
くかき回す霰ちゃん。
左手はもう経血まみれ
だ。「ぬい……ぬいっ」
紛れもなく、戦艦並み
の眼光をもつ十八駆
の末っ子・不知火ちゃん
ののこともだ。うーん、
あの子もずいぶんいろ
んな子に好かれてい
るのね……とつぶやく
と、「それ天然で言っ
てるんだよね？」と卓
月ちゃんが呆れたよう
に言つた。はて？



朝潮型十番艦 霞

下着姿

「霞について来てみれば」じろり、と私を睨む霞ちゃん。こ、怖い。「とって食いやしないわよ！ しつかりなさいよ、あんたがそんなことでどうすんの。ロリコンのくせに、こんなに駆逐のみんなに心配かけて」「心配……」「霞、今の夕張姉ちゃんに言っても」「まったく……ホラ、脱いでやったわよ」

胸部装甲

「論評とか、要らないから！」、赤面しつつ全裸になる霞ちゃん。発展途上なおっぱいがかわい……なんてことよりも、鍛えあげた身体がすごいの一語に尽きる。不知火ちゃんが腹筋割れてるのは有名だけど、アレは十八駆の次女たる霞ちゃんに影響を受けたようだ……

陰部

陰毛は恥丘に少し。その下は睦月型の子たちとあまり変わらない、色素の沈着もない。ただの割れ目だ。こうして見ると十八駆は全員毛が生えているのね……さすが、と謎の感心。「だから論評は要らないって言うてるでしょう!!」この変態!!



性器

「ううっ……、こ、このバカが少しは元気になるんなら、まんこ見せるくらい安いもんよ……！」霞ちゃん、涙目でくばあ、と大陰唇を広げる。クリトリスも小陰唇もかなり小さい。「だから論評すんうがこのクズ!!」



放尿

「うう、バカあ……こんなのぬいや清霜に見られたら……あたし死ぬ……」後ろにつきだしたお尻に手を回して性器を広げ、そのまま排尿、とこの子を「ぬい」呼びなこの……。

自慰

性器を何度も収縮させ、絶頂の余韻に浸る霞ちゃんに、あえて尋ねる。「やっぱり不知火ちゃんなの？」「……わかん……ない……あ、あたしにとつて……い……は……す……ご……く……特……別……な……の……は……清……霜……だ……か……でも、同じくらい清霜だつて大切に想ってるし、大和や矢矧、磯風たちだって……ハハ、なんだあたし、ただの節操なしの淫乱じやん……こんなの、嫌われちゃうよう……うう、うあ……」何泣かじてんだよ、夕張姉ちゃんのバカ!

夕雲型十七番艦 早霜

下着姿

「不知火さん……」最近顕現したばかりの、夕雲型の早霜ちゃんが音もなく傍に来ていて、泣いていた霞ちゃんも私も、私を叱っていた皐月ちゃんも飛び上がった。「通過儀礼のようなものだと伺ったので……私なんかの身体でよければ、どうぞご覧になってください」するすると服を脱ぐと、スラリと手足の長い肢体が露わになった。「か……格差があ」皐月ちゃんが呻く。

胸部装甲

大人っぽい黒いブラ（最近黒い下着を買ったのにとれほど勇気が要ったか！）を下へずらして乳首を出すと、うん、なんと扇情的な方法で、薄い胸部装甲を見せてくれた。『うん、うん、うん』「お思いですか？」「いいえ、よく似合っている、わよ？」

陰部

「中途半端で、お恥ずかしい……です」と赤面しつつ語る陰毛は、割れ目の上端付近に集まって生えているけど、まだまだ少ない。なんとなく手を伸ばして摘んでみると、しつとりと湿っていた。「こういうの……好きかもしれません」



性器

「失礼します……」蚊の鳴くような声で言うと、浴槽のふちに腰掛けた早霜ちゃん、ぐにっ……と大陰唇を押し広げた。外からではわからないほど複雑な形状の小陰唇や、完全に顔を出したクリトリスが露わになる。「すごい大人っぽい……」早霜ちゃんが食い入るように見つめるそばで、霞ちゃんがふいに吐き捨てた。「ぬいで毎日抜いてるからでしょ」



自慰・放尿・懺悔

「霞ちゃん」思わず鋭い声を出すと、霞ちゃんがじつとり湿った眼差しで私を睨みつけた。「そう……です」性器を激しく刺激しながら、早霜ちゃんが息も絶え絶えにこぼす。「あの日……私を助けにきて、そして目の前で散った不知火さんが、私は……」
「私を、憎んでいますか、霞……さん」重い沈黙。「正直」霞ちゃんが口を開く。「あんたが来たら冷静でいられる自信はなかった。でも……それじゃあ、司令を吊るしあげたあのクズ共と変わらない」声が震える。「それに……あんた、そんなに苦しんでるじゃない」「ひうっ」ひきつけのような声を上げ、早霜ちゃんが果てた。しばしののち、じよろろろ……と失禁。「どうして」霞ちゃんが涙声で言う。「誰かを好きでいることが、こんなに苦しいの」

夕雲型十九番艦 清霜

下着姿

「裸見せたら戦艦にしてくれるつて本当!?」元氣よく飛びこんできた清霜ちゃんの発言に、その場の全員が半眼で私を睨む。「……いやあの、ドツクで会った時にホンの冗談でね?」「こんな純真な少女の心を弄ぶとは」「クズ軽巡」「由良さん帰ってきたらしばいてもらおうよ」「ねえ脱いだよ?」「あつ」下着姿の清霜ちゃんはヤバいくらい可愛かったわ……。

胸部装甲

「おお……指でつついてもほとんど沈まなさそうな薄い胸が尊すぎる。」「今はまだ小さいけど、いつか戦艦になったら武威さんみたいになるよね?」「お願い、やめて!」

陰部

「夕張さん、ここが好きなの?」なんかもう輝かしく見える、スツと墨でひいたような割れ目をサツと撫でたものだから、私はドツと鼻血を吹いた。「そ……そうね、そこが嫌いな艦娘なんていないと思うわ」「オイ、主語がとてつもなくデカくないか夕張姉」

性器

「えへへ。ちよつと、恥ずかしいかも」と言いつつ、くにつ。と性器が広げられた。意外に発達した小陰唇のひだを、思わずついばみたくなるけれど、たぶんそうしていいのは私じゃなくて。「ここ、自分で触ったりする？ 清霜ちゃん」「うん。霞ちゃんのことを考えながら触ると特に気持ちいい、です」「!!」少し離れたところにいた霞ちゃんがすごい顔になった。清霜ちゃん、霞ちゃんにまつすぐな視線を向ける。「清霜は、霞ちゃんが好きだから。この前も言ったけど」

強い気持ち・強い愛

「きよ、しも。あたしは霞ちゃんが掠れ声で言う。」「こないだも言いたわよね？」「うん、知ってる。不知火ちゃんが好きだって。事もなげに言ってるのける清霜ちゃん。「いつも怒ってるけど、ほんとはいろんな人のことが、大好きだ。」「私知ってる。」「そんな霞ちゃんのこと、私知ってる。」「あんなも、ぬい霞ちゃんが好きだもん！」「やめてよ!!」も...見送ることじゃかできなかったクスなあたしが、好いていいなんて。「いいんだよ!」清霜ちゃんの力強い声。「霞ちゃんが不知火ちゃんたちを好いても、早霜姉さんが不知火ちゃんを好いても、私が霞ちゃんを好いても、全部いの!」だつて、みんなまた逢えたんだもん! それで嬉しくても、気持ちよくても、つらくても、全部ひつくるめて私たち、いいの!」「うあああ」泣き崩れる霞ちゃん。私たちもみんな泣いていた。...その後のふたりの失禁レスセックスに超興奮した件は、また後日。

白露型三番艦 村雨

下着姿

「やれやれ……手間のかかるお姉さんね」村雨ちゃんが穏やかな笑みを浮かべ、半裸になった。「村雨ちゃん！さみちちゃんたちは!?」皐月ちゃんたちが彼女のまわりに集まっている。よく聞こえない……「搜索」「反応」「艦装」とぎれとぎれに何か聞こえる。「なんだか頭が痛い。」「大丈夫。あの子は強い子だから」村雨ちゃんのその言葉だけが、妙にはつきりと、耳朶を打った。

胸部装甲

「あんまり『小さく』なくてごめんね?」妙に発育のいい白露型の中でも、最近ぐつと大火うぼくなつた村雨ちゃん。白露ちゃんより全然長女っぽい。胸も実に長女っぽい。「でもね。さみちも、いつかは成長するのよ?」ヒエッ……

陰部

今日私があつたなかでは、いちばんしつかりと陰毛が生えている。それほど多いわけではないけど、割れ目はもう前からではほとんど見えない。「すずにも生えてきたし、さみちもそのうち」「ああああ聞こえない聞こえない」

性器

「つゆが最近、よく見たがるのよ。ここ。しかも自分から見せてくるから、姉妹で見せ合いっこになるんだけど、そのたびに大人っぽくてエロいねって触ってきだ、困っちゃう。だって左側のビラビラだけ大きくて、なんかへんじやない？ 自分じゃあんまり好きじゃななんだけど、つゆは気に入ったみたいでね……一度なんて、顔つつこんでくわえられたのよ！ このままつゆが夕張さんみたいな変態になっちゃったら、私どうしよう」「ひどい」「まして、はるまで影響されたりしたら……！」「それは本当にひどいわ！」「ええ！」

放尿

「やだ、夕張さんと趣味が合っちゃうの？……否定できないや。私も女の子のおしっこで、わりと興奮するし。ゆうとかはるとかが、ふざけてドックでおしっこしてるのを叱るけど、あとで自分でもしいっつてしたり、そのときに思わず、くちゅくちゅって……ね」

自慰

「ちよつとちよつと！ 私が整備した魚雷、そんなことに使ってたの!?」ぐちゅ、「んっ、だって……これ、すっごい、気持ちいいんだよ……。してるうちに、膣でイけるようになったっやっ」た「ぐちゅ、ぐちゅっ」「あ、あつ、あああ……」「がくがく、がくっ」「……おまんこ、気持ちいい……」

白露型三五番艦

春雨

下着姿

「姉さんたち……こんなことしていいの？」この夏に現れた、二駆の春雨ちゃん不安げに私たちを見ています。「今だって、ふたりとも」「大丈夫」村雨ちゃんが伏し目がちに答える。「……そう信じるしかないわ。闇雲に捜索隊を増やすこともできないし。それに」チラと私を見て、「今の夕張さんを放っておくわけにもいかないでしょう？」「……わかった」なにやら意を決じたように、春雨ちゃんもぼんつ一枚に。いったい今日は何の日なの？

胸部装甲

「ううう、夕張さんのえっち……」涙目で私を睨む春雨ちゃんぐうの音も出ないほどかわい。五月雨ちゃんや涼風ちゃんの姉さんなのに、同じくらい幼い印象を受ける。それでもおっぱいは睦月型の子たちより全然育っているあたり、さすが白露型だ。

陰部

彼女も、割れ目の上端あたりにちらほらと陰毛が生えつつある。どうやら本当に、まだ生えていない白露型は五月雨ちゃんだけらしい。早く遠征から帰ってこないかな。頭がひどく痛む。

性器

「おまんこ広げるわよ」あえて、普段使わない語彙を囁いてみると、春雨ちゃんの紅潮しきった顔がさらに湯だったように見えた。大陰唇に両の指を添え、ゆっくりと広げる。目立たないクリトリスや小陰唇、小さな膣口。未成熟だ。「知ってる？ 村雨ちゃんね、ここに魚雷を出し入れて、ひとりエッチするの」「うそ……」目を丸くする春雨ちゃん。「すぐく……気持ちよさそうだったわ。あなたの名前呼びながら」「えっ……えっ……」血管が破れるんじゃないかというくらい赤面する春雨ちゃん。キュツとしぼんだ膣口から、とろりと愛液が溢れる……。

放尿

部屋備えつけのトイレに腰かけさせ、足ごと性器を広げる。「さあ、出して……。しー、しー」「うあ……」「しやあああ、と便器の中へ二直線に尿がほとぼしる。今日はじめて、トイレで用を足した子かもしれない。」

「……こんなの、ちがう」
 排尿を終えた春雨ちゃんが、ぽつりどつぶやいた。「気持ちいいけど……ドキドキするけど……今の夕張さん、おかしなもの」
 「はる？」村雨ちゃんの声が鋭さを帯びる、が。

「正気に戻ってよ夕張さん！ わかる!? 由良さんとさみちゃん、遠征中に行方がわからなくなつて、もう8日間もみんな探しているのよ!!」

「へっ?」

性器

「改造して……ホラ、こんなに
広がるようになったよ……。由
良のこと考えていじってるから
っぽい……？ 夕立にだけは、
こういうこと教えてくれるよね、
えっちな夕張は¥……」

放尿

「夕張のせいで、おしっこするのが
すごくえっちなことに思えてきたっ
ぽい……。海のうえでするときも、
鎮守府のトイレでするときも、すこ
く興奮しちゃう……。由良や五月雨
も、今頃どこかでおしっこしてるん
じゃないかな……」

「ううっ……由良あ……さみ……」

「うあああああん」「ゆ、夕立、
あんたが泣いでどうするのよお……」
「だって、だってええ。ゆ、由良が、
五月雨が死んじゃったら、どうしよ
おおおお」「死……嫌、嫌あ、さみ
ち、ちゃん死んじやだあああ」「は、
春雨ちゃん大丈夫だよ……大丈夫だ
よおおおぐええええ」「皐月ちゃ
ん泣いちゃダメだよおおお」「わ
ああああああん」「火がついたよう
に大声で泣きはじめる駆逐艦娘たち。
大合唱は日が暮れるまで続いた……」

「……いや、だからって、いくら心労のあまり錯乱してたからって、駆逐艦の子たち相手に不埒な行為をはたらいていい理由には普通ならないからね？」

「面目ありません……」

「まったく、吃驚したわよ。そりゃあ、完全に通信機能が逝かれたからって、開きなおつてのんびり寄り道しながら、自力で戻ってきたのはちよつと軽率だったわ。さんざんみんなに心配かけといて、おみやげ持ってひよっこり帰ってきたら、呆気にとられるわよね。……でも、おしっこまみれのおんたや夕立たちが裸で抱きあつて泣いているあの光景は、ちよつとばかりクレイジーだったわ。五月雨ちゃん、

シヨツクで寝こんじゃったし。まあ、長旅の疲れもあるとは思うけど……」

「……なんか」

「うん？」

「なんかね。もう一度こうして、皐月ちゃんや五月雨ちゃん、夕立ちちゃん、それに由良たちに会えてよかったなって思った」

「……駆逐艦の子をひん剥いておしっこさせた感想？」

「うん」

「変なの。……ただいま、夕張」

「おかえり、由良」

おしっこれくしょん 駆逐艦編 参
Combined Fleet Girls Collection FAN BOOK Vol.04

発行日 2014年10月19日
第2刷 2015年01月25日

発行サークル LUNATIC PROPHET
web <http://circle.lunaticprophet.org/>
pixiv id=92903

発行人 有村悠 Yuu Arimura
e-mail edgeoftheseason@gmail.com
twitter id=@y_arim

印刷所 株式会社サングループ
web <http://www.sungroup.co.jp/>



PRODUCED BY LUNATIC PROPHET

**さあ、色々試してみても
いいかしら？**

2014.10.19.